バハオラの足跡を辿って
エデルネとアッカ巡礼

主はこの地をこよなく愛す。
彼の王座の据えられたこの地を、
彼の足跡に踏みならされたこの地を、
彼の来訪により栄誉を与えられたこの地を、
彼の呼び声のとどろいたこの地を、
彼の流した涙に潤されたこの地を。

バハオラの「カルメルの書間」より

目次

１．　年表で見るバハオラの生涯
２．　辺境の牢獄　－　エデルネ
３．　最大の牢獄　－　アッカ

１．年表で見るバハオラの生涯

- 1817 年 11 月 12 日　：テヘランにて誕生
- 1835 年 10 月　：結婚　（妻、ナヴァーブ）
- 1844 年 5 月 23 日　：長男、アブドル・バハ誕生
- 1844 年 8 月　：モラ・ホセインを通じてバブの教えを受入れる
- 1848 年６月　：バダシュトでの大会：バハオラを初めとして 81 人の信者が集まり、新しい宗教制の誕生を確認する
- 1851 年６月～1852 年 8 月　：約 14 ヶ月を隣国のイラクで過ごす
- 1852 年 8 月 15 日　：テヘラン郊外で逮捕、テヘランの地下牢に投獄
- 1852 年 8 月～12 月　：多くのバビ教徒と共にシア・チャールと呼ばれるテヘランの地下牢に投獄。投獄中、神の啓示を受ける。
- 1852 年 12 月　：４ヶ月間の投獄の末、祖国を追放される
- 1853 年 1 月 12 日　：家族と共に、追放の地となったイラクのバグダッドに向かう

- 1853 年 4 月 8 日　：バグダッド到着
- 1854 年 4 月 10 日　：突然バグダッドを後にして、単身イラク北部の山岳地帯に隠遁
- 1856 年 3 月 19 日　：２年間のスレイマニエ山中での隠遁生活を終えてバグダッドに帰還
- 1858 年　：バグダッドにて「かくされたる言葉」を著わす
- 1860 年　：バグダッドにて「七つの谷」を著わす
- 1862 年　：バグダッドにて「確信の書」を著わす
- 1863 年 3 月 25 日　：バグダッドからの追放を予感させる「聖なる水夫の書簡」を著わす。その直後トルコ帝国の帝都コンスタンチノープル（イスタンブール）への移動命令が発布される
- 1863 年 4 月 21 日　：バハオラの宣言。バグダッドを離れる直前、バハオラはバグダッド郊外のレズワンの園で 12 日間を過ごし、ここで初めて神の顕示者であることを宣言された。
- 1863 年 8 月 16 日　：帝都コンスタンチノープル（イスタンブール）到着
- 1863 年 12 月 12 日　：コンスタンチノープル追放。アドレアノープル（エデルネ）に到着「アーマドへの書簡」にある「辺境の牢獄」はエデルネを指す。現存するバハオラの写真はエデルネで撮影されたものである。
- 1865 年　：弟ミルザ・ヤーヤのバハオラに対する攻撃が本格化し、バハオラは毒をもられる。命は取りとめるが、後遺症が残る（手の震え）。後年のバハオラの筆跡にその影響が見られる。
- 1866 年 3 月　：バハオラの宣布。世界の多くの指導者に宛てた「宣言の書簡」を著わす
- 1868 年 7 月 28 日　：エデルネ追放の命令書の発布
- 1868 年 8 月 12 日　：エデルネ追放。バハオラは 66 人の家族や信者と共にアッカに向かう
- 1868 年 8 月 31 日　：アッカ到着。バハオラが「最大の牢獄」と呼ぶアッカの牢に投獄
- 1869 年　：イラン国王に宛てた「宣言の書簡」（エデルネにて著わされたもの）を 17 歳の青年（バディー）に託す。バディーは書簡を届けて後に殉教。
- 1870 年 6 月 23 日　：バハオラの 22 歳の息子、ミルザ・メーディがアッカ牢中で転落死
- 1870 年 11 月　：アッカの牢獄から解放、アッカ市内の民家に監禁状態
- 1873 年　：アッカ市内にて「アグダスの書」を著わす
- 1877 年 6 月　：アッカ市内での監禁状態を解かれ、郊外のマズラエに移る
- 1879 年 9 月　：マズラエからバージに移る
- 1891 年夏　：ハイファに３ヶ月間滞在。「カルメルの書簡」を著わす。このとき、バハオラはカルメル山に立ち、バブの霊廟が建てられる位置を指示。
- 1892 年 5 月 29 日　：バハオラの昇天　（75 歳、バージにて）

バハオラの４０年間の追放の旅

＊ テヘラン出発　　1853 年 1 月 12 日
＊ バグダッド到着　1853 年 4 月 8 日
＊ バグダッド出発　1863 年 5 月 3 日
＊ コンスタンチノープル（イスタンブール）到着 1863 年 8 月 16 日
＊ コンスタンチノープル出発 1863 年 12 月 1 日
＊ エデルネ（アドレアノープル）到着 1863 年 12 月 12 日
＊ エデルネ出発　　1868 年 8 月 12 日
＊ アッカ到着　　1868 年 8 月 31 日
（地図の茶色い部分は当時のトルコ帝国の範囲を示す）

２．辺境の牢獄　－　エデルネ

おお、アーマドよ。私のいない時でも私の恵沢を忘れず、私の過ごした日々と、*この辺境の牢獄*での私の苦難と追放とを、日々記憶せよ。そして、たとえあなたの上に敵の剣が雨と降り注ぎ、天地が共にあなたに歯向かっても決してたじろぐことのないほどに私の愛に確固としたものであれ。

アーマドへの書簡より

（１）バグダッドから帝都コンスタンチノープルへ

バハオラがバグダッドで過ごされた１０年（1853 年 4 月～1863 年 4 月）は突然終わりを迎えました。バハオラに敵意を抱く人々の誹謗中傷の結果、トルコ帝国政府の移動命令が下ったのでした。しかし、それは敵が期待する追放ではなく、むしろトルコ政府はバハオラを客人として帝都コンスタンチノープル（現在のイスタンブール）に迎える意向でした。政府は総勢５４名のバハオラの一行（バハオラご自身と家族、バハオラの２人の兄弟とその家族＝２８人。同伴した信者＝２０人。途中まで同伴が許された信者＝６人）に護衛を付け、馬や馬車を提供しました。

バハオラの一行は 1863 年５月にバグダッド郊外のレズワンの園を離れ、進路を北西にとりチグリス川に沿って、遥か北方にある黒海の港町サムスーンに向かいました。サムスーンまでの陸路が 110 日、そこからは３日間の航海で帝都コンスタンチノープルに到着しました。帝都に入城したのは 1863 年 8 月 16 日のことです。

（２）暴虐の玉座　－　帝都コンスタンチノープル

バハオラは帝都コンスタンチノープルに４ヶ月間滞在されました。バハオラはこの地を「暴虐の玉座」と呼び、帝都で受けた不当なあつかいについて次のように書かれています。

「我々は客人としてこの地に招かれてきたが、彼らは何の罪もない我々に激しく襲いかかった。もし我々が一歩も譲らず、世界の中心にあるこの地で殉教していたならば、この殉教の影響は神のすべての世にとどろいたであろう」。

ショーギ・エフェンディはこの時期の状況について次のように説明されています。

「バハオラのコンスタンチノープル到着は、バハイの歴史の最初の 100 年における最も暗く、最も悲惨な時代の幕開けを意味するものであった。しかし、同時にそれは最も栄光に満ちた時代の幕開けでもあった。それは、語り尽くすことのできない苦悩と、前例のないほどの試練が、最も崇高な精神的勝利と相交互する時代の始まりであった。まさにそのとき、バハオラの啓示の太陽はその頂点に到達しようとしていた」。

ショーギ・エフェンディ著「神よぎり給う」より

２．　辺境の牢獄　－　エデルネ

バハオラが１年間滞在されたエデルネの「レザ・ベグの家」

バハオラはトルコ政府の客人として帝都コンスタンチノープルに迎え入れられましたが、そのわずか４ヶ月後、今度はなかば囚人として帝都を追放されました。新しい追放の地となったのはトルコ帝国の最北端に位置するアドレアノープル（現在のエデルネ）でした。エデルネはヨーロッパ大陸に位置し、今日のブルガリア国境に近いところにあります。バハオラはエデルネに４年８ヶ月間滞在され、この地を「辺境の牢獄」と呼ばれました。

極寒の行進：　バハオラと追放を共にしたのはご自身の家族と、12 名の信者のみでした。それ以外の信者たちは、各地にバハオラの宣言の吉報を伝えるために散らばっていきました。バハオラの一行は 1863 年 12 月初旬、記録的な寒波のなかでコンスタンチノープルを離れて北進の旅を始めました。寒さに備えるすべもなく、雪や氷を溶かして飲み水にしながら一行は凍りつくヨーロッパの大地を 12 日間行進し、ようやく 12 月 12 日にエデルネに到着しました。バハオラはこの追放の旅について次のように書いておられます。

「彼らはこの地上に類を見ないような屈辱をもって我々を追放した。我が家族や我が同伴者たちはあの凍える気候の中、寒さから身を守る衣服ももたなかった。我々の姿に、我々の敵の目も涙に潤んだ」。

アムロラの家：　エデルネのアムロラの家は３階建てで、最上階にバハオラとその家族が住み、２階にはバハオラの弟（ミルザ・モハメド・ゴリ）とその家族が住んでいました。同伴の信者たちは１階部分とはなれに住んでいました。また、近くに家を２軒借り、そこにはバハオラの弟のミルザ・ムーサとミルザ・ヤーヤが住んでいました。食事はすべてアムロラの家の厨房で用意され、そこから他の２軒の家の住民を含む全員に届けられました。バハオラの勧めで職業につき、この家を中心とする共同体生活はその後も続きました。このような状況は一年ほど続きましたが、そのあとに控えていたのは最も厳しい試練と激動の日々でした。

バハオラの驚異的な執筆量：　エデルネに到着後、バハオラとその一行は徐々に平静を取り戻し、バハオラはそれまでにない驚異的な活動期を迎えられました。啓示の言葉は日夜洪水のように放出され、信者たちはその言葉を速記するもの、それを清書するもの、それをまた写本するものと、大忙しでした。写本が済んだ書物は西へ東へと送られ、神の新しい啓示の誕生は世界に広く伝えられました。この時期のことをバハオラは次のように語られています。

「神聖なる雲より降り注ぐ神の恩恵の偉大さのために、一時間の内に一千行に相当する聖句が啓示された」。「その地（エデルネ）にて既に啓示された聖句を秘書たちは書き写すことすらできない。従って、その多くは未だ写本にいたっていなり」。

アーマドへの書簡：　「アーマドへの書簡」はエデルネのアムロラの家滞在中の 1865 年に著わされたものです。アーマドはバハオラとの別離を我慢できず、バグダッドからバハオラの後を追ってきた信者でした。コンスタンチノープル到着時に書簡を受取ったアーマドは、その内容について熟考し、結局バハオラのおられるエデルネには行かず、彼の切なる願いであったバハオラの面前での奉仕を断念し、そのまま布教の最前線に向かう決意をしました。バハオラはアーマドにこう書かれています。**「...現世と来世にわたる奉仕を定められた。これらの恩恵は私の方からの恵沢として、また私のもとからの慈悲としてあなたに与えられた。それによりあなたが感謝する者らの中に数えられんことを願う」。**

広がり行く宣言の範囲：　バハオラがご自分の使命について最初に宣言されたのは言うまでもなくバグダットを離れる直前（1863 年 4 月 21 日）のことでした。これはバハオラの周辺にいたほんの数名の人々に対する宣言でした。しかしエデルネ到着後、バハオラは無数の書簡を通じてすべてのバビ教徒に向けて神の約束された顕示者の出現の吉報を告げられました。次の段階ではバハオラは「為政者たちへの書簡」を通じて当時の世界の主な指導者たちに対してご自分の使命について宣言されました。各国に宛てた書簡は様々な方法で国王たちに届けられました。なかでもイラン国王に宛てられた書簡は、バディーという青年によって届けられました。バディーはその場で捕らえられ処刑されました。宣言の最終段階におよんでバハオラは世界のすべての人々に向けて新しい啓示の誕生を告げられました。

エデルネの暗黒の春：　バハオラを最も苦しめたのは 13 歳年下の異母の弟、ミルザ・ヤーヤの敵と反逆でした。宣言の広がりと共に多くの人々がバハオラの教えを受け入れて行く様子を目の当たりにしたミルザ・ヤーヤの嫉妬と敵意は増幅されて行きました。最終的にミルザ・ヤーヤはバハオラの命を奪うことを決意し、何度かバハオラの殺害を試みました。最初に試みたのはバハオラの毒殺でした。ミルザ・ヤーヤは自分で調合した毒物を紅茶のコップに塗り、バハオラに飲ませたのです。その結果、バハオラは重態となり、１ヶ月あまり高熱と激痛に苦しめられました。バハオラは命を取り留めましたが、毒の後遺症で手の震えが障害残りました。この事件の痛々しい証拠をハイファにある国際資料館に見ることができます。事件以前のバハオラのすばらしい筆跡と、事件後の細かく震える筆跡が並べて展示されています。また、毒を飲まれた際にバハオラは吐血されましたが、その血のにじんだハンカチも国際資料館に残されています。

これら一連の事件が明るみになると、バハオラはアムロラの家を去り、レザ・ベグの家に移られ、２ヶ月の間、信者たちとの交流や面会を一切断たれました。その目的は、信者たちにバハオラを取るか、それともミルザ・ヤーヤにつくかの選択を迫るためでした。こうして、

長年バハオラを苦しめ続けたミルザ・ヤーヤとその仲間はバハイ共同体から離れて行きました。1866 年の春のことです。バハオラはミルザ・ヤーヤについて次のように書かれています。

「永い年月にわたり、我が慈愛の手によって育てた者が、我が命を奪うと立ち上がったのである」。

また、こうも書いておられます。

「迫害者が犯した残虐行為により我が身体は折れ曲がり、頭髪は白髪と化した。もし汝が我が王座の前に進み出る機会があれば、きっと汝は古来の美［バハオラご自身を指す]を見まちがえるであろう。不信仰者の圧政により古来の美の面を飾った新鮮さは変質し、その輝きは薄れたのである」。

<u>更なる追放決まる：</u>　ミルザ・ヤーヤが 「バハイ共同体」を去った後も、彼とその仲間の敵対行為は続きました。トルコ政府に対しバハオラに関する虚偽の証言をすることによりバハオラを追い詰めることが主な目的でした。そして、ついに 1868 年 7 月 26 日、トルコ政府はバハオラに対し追放命令を下し、トルコ帝国の牢獄の町アッカ追放を命じました。同時に、ミルザ・ヤーヤとその家族は地中海に浮かぶキプロス島に追放されることになりました。ただし、トルコ政府はバハオラの信者たちの中から４名を選びミルザ・ヤーヤと共にキプロスに追放し、逆にミルザ・ヤーヤの仲間数名をバハオラと共にアッカに追放しました。このことは後に色々な悲劇を生むこととなりました。

<u>全員逮捕：</u>　追放令が発行された直後の早朝、アムロラの家は突然軍隊に包囲され、そこに住む全員が逮捕され、家財はすべて没収され、エデルネを直ちに離れる準備に入りました。バハオラの要請により出発まで約一週間の猶予期間が認められました。その間、エデルネ在住のヨーロッパ各国の領事たちがバハオラのもとを訪れて救済を申し出ましたが、結局バハオラは彼らの援助を断られました。

３．　最大の牢獄　－　アッカ

「城門よ、頭を上げよ。とこしえの門よ、身を起こせ。栄光に輝く王が来られる。栄光に輝く王とは誰か。万軍の主、これこそ栄光に輝く王である」

旧約聖書、詩編２４：９

<u>エデルネを後に：</u>　バハオラの一行は 1868 年 8 月 12 日にエデルネを離れ、陸路ガリポリの港に向かいました。ガリポリからオーストリア船籍の船に乗り、エジプトのアレクサンドリアを目指して地中海を南下しました。アレクサンドリアに付くと船を乗り継いでハイファに向かい、ハイファで下船し、こんどは小舟に乗ってハイファ湾を横切り、1868 年 8 月 31 日の午後、バハオラの最後の幽閉地となるアッカに到着しました。全行程、10 日間の旅でした。この日、総勢６７名の家族や信者がバハオラと共にアッカの海門を潜って要塞の町に入ったのでした。

鉄格子に堅く守られたアッカの海門

<u>アッカとその周辺で過ごされた２４年間：</u>　バハオラは 1868 年 8 月 31 日から亡くなられるまでの 24 年間をアッカとその周辺で過ごされました。これを三つの時期に分けることができます。

１．アッカの牢獄での獄中生活:(2 年 2 カ月と 5 日)
1868 年 8 月 31 日～1870 年 11 月 4 日。バハオラはアッカの牢獄を「最大の牢獄」と呼ばれました。この牢獄は当時の姿のまま保存されており、巡礼者はバハオラの独房に入ることができます。

２．アッカ市内での自宅監禁:(約 7 年間)1870 年 11 月～1877 年 6 月
牢獄解放後、バハオラと家族はアッカ市内の民家を転々とし、最終的には地中海に面する堤防沿いに立つ「アブードの家」に移り住みました。アグダスの書が著されたのも、アブド

ル・バハが結婚されたのもこの家での出来事です。アブードの家で過ごした約 6 年間、「自宅監禁」がやがて「軟禁」に変わり、次第に自由度が増しました。

３．アッカ市外への移住:(約 15 年間)1877 年 6 月～1892 年 5 月
移動の自由が保障されると、バハオラは緑のまったくないアッカ市内を離れて郊外の田舎に移られました。まず、約 2 年間マズラエに住まれ、その後、バージに移られ、ここで 晩年を過ごされました(約 13 年間)。バハオラの霊廟はバージの邸宅の横の別棟にあります。

<u>アッカの歴史：</u>　アッカは東部地中海有数の自然港を誇り、貿易の拠点として、また軍事基地として 5000 年余りの歴史を持つ UNESCO 世界遺産に指定された古代都市です。古代名をアコ(旧約聖書)、もしくはプトレマイス（新約聖書)と言います。12 世紀に十字軍がエルサレムを目指して進行した際、アッカは 200 年近く十字軍の前線基地として、またヨーロッパの王たちの聖地での「首都」として栄えました。1291 年には、中国に向かう途中でマルコ・ポーロがアッカに立ち寄ったと言う記録があります。その 20 年後、アッカはイスラム軍によって完全に破壊され、その荒れ果てた姿は 300 年間手つかずのまま放置されました。アッカの再建は 1600 年ごろに始まり、トルコ帝国の重要な軍事拠点として二重の堀に守られた要塞の町として生まれかわりましたが、度重なる戦火の煽りで再び「荒城」の運命を辿ることとなりました。1799 年にはナポレオン率いるフランス軍の攻撃を受け、1831 年にはエジプトとの戦争、1840 年にはイギリス・オーストリア連合艦隊の艦砲射撃で壊滅的な被害を被りました。バハオラがアッカに到着された時、そこには昔の栄華の面影はまったく残されていませんでした。人口は一万人弱、衛生環境や気候は非常に悪く、町の生命線とも言われた古代ローマ時代からあった高架式の水路も破壊され飲み水にもことかく状態でした。このような状況にある「地の果ての牢獄」に送ればバハオラは決して生きながらえることはできないと当局は考えたのでした。バハオラは当時のアッカを次のように描写されています。

「世界の最も荒廃した町、最もみにくい町、最も忌まわしい気候の町、最も水質の悪い町。それはあたかもフクロウの都である」。

<u>アッカでの最初の一日：</u>　海門を潜ってアッカの要塞に入ったバハオラの一行は、直ちに警察署に連行され留置所に入れられることになっていましたが、留置所のあまりもの狭さに、当局の計画は変更を余儀なくされ、一行はその日のうちに、アッカに駐屯するトルコ軍の兵舎に移されました。バハオラをはじめとする何名かは兵舎内にある石造りの塔の最上階に入れられ、他の人々は別塔の兵舎に監禁されました。アッカ到着当日は、丸一日間、食べ物はおろか、飲み水も与えられませんでした。

<u>バハオラの流刑の条件：</u>　バハオラをアッカに追放する際、トルコ政府が発行した命令書には次の三つの流刑の条件が書き記されていました。
(1)バハオラに対する追放令は「終身刑」であって、生涯解かれない。
(2)監禁は最も厳しい条件下で実施されなければならない。
(3)バハオラと外部との接触は一切許可しない。また、バハオラとその同伴者たちとの接触も最小限に抑える。

この命令書は、バハオラがアッカに到着されたときに街の主要な寺院で読み上げられ、市民に警告が発令されたのでした。

伝染病の蔓延するアッカ：　比較的温暖な気候のエデルネから猛暑のアッカに追放された一行は、たちどころに伝染病に冒され、到着直後に速くも犠牲者がでました。朝、起きて見ると熱病に冒されていた二人の兄弟が、互いに抱き合った姿で息を引き取っていました。その遺体を埋葬するには、兵舎の看守たちに頼むしかありません。バハオラはご自分が使われていた絨毯を看守に渡し、それを売ったお金で埋葬を依頼することになりました。

ある看守の物語：　アッカ到着間もないころの牢獄の様子をアブドル・バハは次のように語っておられます。

「当時、私たちは毎日のように人に頼んで飲み水を汲んできてもらっていました。素焼きの水瓶を買い、それに遠くから牢獄まで運んでもらうのです。水が牢まで運ばれて来ると、看守たちが水瓶の中を調べることになっていました。ところが、意地の悪い看守がいて、この男が看守に立つ日は、水のない状態で一日を過ごすことが多かったのです。つまり、男は水瓶の中に何か忍ばせている疑いがある、と言うことを口実に、わざと水瓶をぶつけあって割るのが常でした。実に、アッカの獄中の日々はこのようなことの連続で、夜になると我々はその日の出来事を語り合うのが日課でした。そしてどんな辛いことでも、共に語り合うと、それが不思議なほど滑稽に思え、毎晩遅くまで我々の獄舎では笑い声が絶えませんでした」。

兵舎を転用したアッカの牢獄
バハオラはこの牢獄に２年２ヶ月と５日間幽閉されていました

巡礼者の到来：　アッカ追放に苦しめられたのはバハオラとその一行だけではありませんでした。バハオラの新しい追放地が確認されると、遠方からアッカを訪問する巡礼者が後をたちませんでした。でも、バハオラに会うことはほぼ不可能でした。アッカ市内に入ろうとすると城門で止められ、仕方なく二重に張りめぐらされた堀の外の小高い丘に立ち、終日バハオラの独房を眺めるのが巡礼者の常でした。時折、バハオラが窓越しに姿を現わし、遠くに立つ彼らに手を振られました。うまく市内にはいれても、バハオラが収監されている兵舎に近づくことは当初まったく望めませんでした。バハオラの「断食のための祈り」の中に次のように書かれています。

「ある者は、あなたの国土の不信心なる者らに囚われ、あなたに近づくこともご栄光の御宮居に到達することも阻まれました。他の者は、あなたに近づきながらも、あなたのお顔を拝することができませんでした。また、他の者は、あなたを仰ぎ見ることを切望し、あなたの御宮居の境内に入ることを許されましたが、あなたの創造物が抱く空想と、あなたの民に降りかかった迫害者たちの悪しき行いとが暗幕となり、あなたとの間をさえぎられることを許してしまいました」。

突然の悲劇：　アッカの獄中で三度目の夏を迎えた 1870 年 6 月、誰も予想できなかった悲劇が起こりました。バハオラの次男のミルザ・メディーが牢獄の屋上の明かり窓から転落し、22 歳の若さで亡くなりました。ミルザ・メディーは束の間の孤独と平静を求めて、夜毎牢獄の屋上にのぼり、祈りと瞑想に耽るのを日課としていました。暗闇の中で足を踏み外し、明かり窓から転落し、運悪くそこにあった木箱に胸を強く打って、翌日息を引き取ったのでした。ミルザ・メーディはアブドル・バハより４歳年下の弟で、バハオラが祖国を追放されるとき、まだ幼児であったため、独りテヘランに残されました。それから何年か後にバハオラはこの息子をバグダッドに呼び寄せられました。バハオラは、ミルザ・メディーを「最も清らかな枝」と呼ばれました。

ミルザ・メディーの最後の願い：　ミルザ・メディが明かり窓から転落した時、バハオラはその場に駆けつけ、血まみれになった息子をご自分の胸に抱きかかえられました。その時に交わされた言葉が次のように記録されています。
バハオラ: 息子よ、お前の望みは何か、言ってみなさい。
ミルザ・メディー：　バハの人々が自由にあなたに会えるようになるのが私の願いです。
バハオラ: 神はお前の望みを叶え、必ずお前の願う通りになろう。

ミルザ・メディーに関するバハオラの祈り：

「おお、わが主よ。あなたが私に授け給いましたものを、私はあなたに捧げまつる。それによりあなたの僕らに命が与えられ、地上に住むすべての者が調和できるように」。

牢獄からの解放：　ミルザ・メディーが不慮の死を遂げた直後、アッカ周辺に駐屯するトルコ軍に突如大移動の命令が下り、バハオラが監禁されていた兵舎が軍隊に明け渡されることになりました。転落事故からわずか 4 ヶ月後、バハオラは牢獄から解放され、アッカ市内の民家に移ることになりました。同伴者たちもアッカ市内のカラバンセライ（商人宿）に移動しました。このようにして次第に信者たちはバハオラに会える状況に向かっていきました。

民家への移動：　当時のアッカにはアラブ系キリスト教徒が約 5000 人住んでいましたが、バハオラとその家族に住居を提供したのはこれらのキリスト教徒でした。逆に、アッカの人口の大半を占めたイスラム教徒は当初「ペルシャから流されてきた囚人」を恐れ憎んでいました。牢獄から解放されたバハオラはアッカ市内のキリスト教徒地区の民家を転々とし、ようやく解放からほぼ一年が過ぎた 1871 年 9 月、やはりキリスト教徒であったウーディ・カンマールの家に入居しました。この家もかなり手狭で、一つの部屋に男女 13 人が寝泊まりする状況でしたが、バハオラはここに 2 年間住まわれました。家主のウーディ・カンマールは裕福な商人であって丁度そのころ、アッカ郊外のバージに大邸宅を建てたばかりでした。空き家になった市内の家を「囚人」に貸すことに周囲の人々は猛反対しましたが、ウーディ・カンマールはそれを押し切ってバハオラを入居させたのでした。

さて、バージに完成したウーディ・カンマールの豪邸はこの地方に類を見ない程の素晴らしいものでした。贅を尽くし、苦労を重ねて建てたこの家には当初誰も想像できない運命が待ち受けていました。1879 年、アッカとその周辺にペストが大流行し、ウーディ・カンマールの家族はバージを捨てて遠方に避難しました。結局、家族は空き家になったバージの邸宅をバハオラに貸すこととしました。こうして、バハオラは晩年をこの素晴らしい自然に囲まれた邸宅に過ごすこととなり、バハオラの霊廟も屋敷の一角にあります。

アブードの家
前方（赤い屋根の部分）がアブードの家
右後方の部分がウーディ・カンマールの家

バハオラがアグダスの書を著わされた部屋（アブードの家）

<u>アブードの家：</u>　ウーディ・カンマールの家の隣に住んでいたのが彼の甥に当たるアブードという人物でした。当初アブードはバハオラとその家族を極端に毛嫌いし、叔父が囚人たちに家を貸すことを何とか阻止しようとしました。叔父を説得できなかったアブードは仕方なく隣の家との壁を補強し一切の交流を避けていたのですが、やがてバハオラの尊厳に魅せられ心引かれて行きました。当時、アブドル・バハには決まった結婚相手がいたのですが、なぜか中々挙式されませんでした。アブードはこのことを不思議に思い、なぜ早く結婚しないのかと何度か尋ねて見ましたが、はっきりした返事は得られませんでした。そうする内、アブードにもその理由が判明しました。ウーディ・カンマールの家が余りにも狭いので、アブドル・バハは結婚されてもそこに新居を構える余裕がなかったのです。そこでアブードは自分の家の最上階をアブドル・バハに提供し、バハオラの住むウーデー・カンマールの家との間で自由に行き来できるように建物の壁を一部取り除いて２件の家を通路でつなげました。アブドル・バハの結婚から約１年経過した 1873 年末、アブードは自分の家の全体をバハオラに提供し、バハオラは充分なスペースのあるこの家に移られ、４年間の歳月を過ごされました。

<u>ある信者の記録:</u>　アブードの家に滞在中のバハオラやアッカ在住の信者たちの生活の様子を記したある信者の記録を次に紹介します。これは、バハオラがマズラエに移られる数ヶ月前（1877 年)のことを記述したものです。

「当時のアッカには、定住者と旅行者を合わせると 100 名ほどのバハイが常時いました。ほとんどの人が何らかの職についていました。そこにはすばらしい愛と和合の精神がみなぎっていました。信者たちは共にいることを至上の喜びとし、互いに助け合ったり、奉仕しあったりすることを誇りとしていました。このような環境のもと、我々はあたかも楽園に住んでいるような気分でした。

バハオラは信者たちの中の数名をご自分の部屋に呼ばれることを日課とされていました。通常、対面が許されるのは、日の入り３時間前からだいたい日の入り３時間後までの時間帯に決まっていました。従って、信者たちは日の入り３時間前になると仕事をやめてバハ

オラの家の前の道に集合しました。ある者は家の回りを周回し、ある者は起立し、また、車座に座して待つ者もいました。当番に当たった者は、家の中に入り、アブドル・バハに指示された仕事などをしていました。

見上げると、２階のベランダを歩かれるバハオラのお姿があります。慈悲と恩恵の証として、時折バハオラは手で合図され、何人かの信者をご自分のもとに招かれるのでした。家の前に集合する信者たちは完全な和合の精神のもとで一つの心に結ばれていました。「隣に立つバハイのために我が命をおしみなく捧ぐ」というのが我々の信念でした。ですから、我々の中の誰かがバハオラに呼ばれると、皆が一同に喜びを感じました。呼ばれた者は感動のあまり我をも忘れ、全速力で家の入口に駆けよります。こちらから声を掛けてもまったく聞こえていないようでした。建物の中に入ると、その感激と興奮はどっしりとした石壁に反響して増幅されるようでした。

「主のもとに行くのだ!主の御前に行くのだ!」それはまさにいかなる人間も想像しえないほどすばらしい楽園に招かれる意味を持つのです。「それがどのような楽園なのか」と尋ねられても、自分で体験したことのない人には説明できません。自分で経験していなければ、この楽園の様子や昔の響きや感触を心に描くことは決してできません。

バハオラに呼ばれた者がやがて家の中から出てきます。興奮のあまり意識がもうろうとしていて普通の状態に戻るまでしばらく時間がかかります。それまでは友の顔を見分けることもできず、言葉を語ることもできません。たったいま家の中でバハオラに聴いた言葉を満足に反復できる者は稀にいました。しかし、主と向かい会った時に経験した自分の精神状態を説明したり描写したりできる者は誰一人としていませんでした」。

（ミルザ・ヘイダル・アリの回想録より）

<u>絶えることのない苦悩：</u>　牢獄からアッカの民家に移り住むことによりバハオラの生活環境は大きく改善されました。しかし、その苦悩は軽減されることはありませんでした。この時期のバハオラの心境を如実に現わしているのが 1871 年後半に著わされたバハオラの「火の書簡」です（新・祈りの書、340 ページ参照）。書簡の結びにバハオラは、この書簡を読めば「何がわが身に降り掛かったかを知るであろう」と書いておられます。そして、「すべての僕がこれを読み、熟考するならば、彼らの血管中に諸々の世界を燃え上がらせる火が赤々と燃え立つであろう」。

「火の書簡」の内容はまさにバハオラの心の叫びそのものです。

「惨禍はその極に達しております」
「屈辱はどん底にまで達しております」
「私は異国にあって見捨てられております」
「バハは苦難の海におぼれかけております」
「不信心な者たちは四方八方に暴虐をふるっております」
「この顔は中傷の塵の中に隠されております」
「バハの顔は苦難の熱...により燃え上がっております」

「火の書簡」の前半部分はバハオラの苦しみを伝えるものですが、後半部分にはバハオラの心の叫びに対する「神の返答」が記されています。

「汝は忍び、耐えるために創造された」

「汝の孤独により一体性の太陽は輝き出た」
「汝の追放により和合の地は飾られた」
「我は屈辱を栄光の衣とし、苦難を汝の聖堂の飾りとした」
「剣がひらめく時、前進せよ、矢が飛ぶ時、突進せよ」
「おお諸々の世界の生贄なる者よ」

<u>アッカを後に：</u>　その後、アッカを治める知事が次々と交代し、バハオラに対する当局の態度も次第に変わって行きました。バハオラを囚人として扱うのではなく、この地に定住する「聖者」として見るようになりました。そして、1877 年の夏、バハオラは 9 年ぶりにアッカの城門をくぐり、アッカ郊外にあるマズラエに移り住まわれました。この時のことをアブドル・バハは次のように記録されています。

<u>マズラエへの移動：アブドル・バハの証言</u>

「バハオラは田舎の緑と美しい風景をこよなく愛されました。ある日、バハオラはこう言われました 「私は９年間、草木の繁る姿を見ていない。魂の世は田舎にあり、都会は肉体の世界に過ぎない」。私はこの言葉を聞き、バハオラが田舎に移ることを切望されていることを知りました。バハオラの願いの成就のためであれば、いかなる試みも成功に導かれると確信し、私は直ちに行動に出ました。当時のアッカには我々を嫌っていたサブワトと言う男がいました。この男はアッカから北へ 6 キロばかり行ったところにマズラエと呼ばれる素晴らしい邸宅を持っていました。家の周囲には庭園があり小川が流れていました。私はサブワトを訪ねてこう彼に言いました。「あなたはマズラエの家を捨ててアッカに住んでおられる」。すると彼はこう答えました、「私は病身のため町を離れることはできないし、マズラエにいると友人たちと会えないので淋しい」。そこで私は 「あなたが使わない間マズラエを私たちに貸してください」と頼むと、彼は驚いた様子を見せましたがすぐに承諾しました。５年間の賃貸契約を結び、邸宅の修理に直ちに取りかかりました。庭園を整え、浴室を造り、バハオラのために一台の馬車を用意しました。ある日、私は自分の目でマズラエを見ようと決心しました。私たちは、アッカの城外に出ることを許されていませんでしたが、城門に立つ憲兵は門をくぐる私を止めようとはしませんでした。それでマズラエを見ることができたのです。翌日、私は数名の友や役人たちと共に再びアッカ城外に出ましたが、この時も何のとがめもありませんでした。その後、私は郊外の松の樹の下にテーブルを整えて宴会を催し、アッカの主だった人々や役人を招きました。夕方には、皆一緒にアッカ市街に帰って行きました。

このようなことがあった後、私はある日、バハオラの御前に行って次のように申し上げました。「マズラエの邸宅の用意は整いました。馬車の準備もできています。」しかし、バハオラは 「私は囚人の身である」と言われ、私の申し出を断られました。その後、二度、三度と同じように申し出ましたがいつも断られるばかりでした。

当時アッカにはシェイク・アリと言うイスラム教会の指導者がいました。彼はバハオラを心から愛し、バハオラの寵愛の的でもありました。私はこのシェイク・アリを通じてもう一度バハオラにマズラエへの移動を嘆願することにしました。私は彼にこう依頼したのです。「あなたは思い切ったことのできる方です。バハオラの御前に行き、ひざまずきバハオラの両手をとって、バハオラがアッカを離れると約束されるまでは握った手を放さないでください」。

シェイク・アリはその通り実行しました。バハオラの両手を握って「なぜアッカを出られないのですか」と訴えました。「私は囚人の身である」とバハオラが答えられると、「断じてそのようなことはありません。誰があなたを囚人とする権力を持っているでしょうか。あなた御自身があなたを牢獄に留めておられるのです。この牢獄生活はあなたの御意志だったのです。牢獄を後にしてマズラエに移られることをお願いします。マズラエは青々とし、樹木は美しく、オレンジの実は火の玉のようです」。バハオラは 「私は囚人であるからそのようなことはできない」と言われるたびにシェイク・アリはバハオラの両手をとって接吻し繰り返し嘆願したのでした。一時間もねばった末、彼の忍耐が酬いられ遂にバハオラは 「よろしい」と答えられました。翌日、私は馬車でバハオラをマズラエに案内し、バハオラをそこに残して自分だけアッカに戻りました。実は、私はバハオラと会合したり交際したりすることをトルコ皇帝の厳重な指示によって禁止されていたのです。それにもかかわらず、あの日、マズラエに向かうバハオラの馬車の行く手を阻むものは誰もいませんでした」。

アッカの郊外にあるマズラエ

<u>マズラエでの日々：</u>　厳しい監視下にあったアッカとは違い、マズラエでは比較的容易に巡礼者や他の信者たちがバハオラに会えるようになりました。爽やかな風が木々を揺らすマズラエの庭ではバハオラを囲んでの食事会も開かれるようになりました。これらの祝宴は「フィースト」と呼ばれ、今日の「19 日毎のフィート」の原型ともなっています。ある信者は当時の様子を次のように記録しています。なお、これは 1879 年の話であり、このころバハオラはすでにマズラエからバージに移り住まわれていましたが時折マズラエに行かれることもありました。

「春になるとバハオラはマズラエに行かれ、しばらく滞在されました。マズラエはアッカ市街から北へ 12 キロほど行った場所にあり、私はバハオラに会うために昼間マズラエに行き、夜は巡礼者会館に戻ることを繰り返していました。アヤメハ［断食の前の閏日の期間］の最初の日、巡礼者の一人が祝宴を催してバハオラとアッカ滞在の信者たちを招待

しました。私も招かれてマズラエに行きました。早朝、マズラエの庭の前の清々しい田園の中に大きなテントが張られ、聖地に滞在する信者や巡礼者の合わせて 200 人ほどがその日マズラエに集まりました。

お昼ごろ、祝福された美［バハオラ]が屋敷から出てこられ、非常に荘厳なおもむきでテントに入られました。信者たちは全員テントの前に起立していました。次にミルザ・アガ・ジャン[バハオラの秘書]がバハオラの御前に進み、その日に著されたばかりの「断食のための夜明けの祈り」を唱えました。祈りが終わるとバハオラは全員に座るよう命じられ、私たちは立っていたその同じ位置に座りました。次にバハオラからお言葉がありました。それが終わるとバハオラはこう言われました。「フィーストはどうしたのですか。本当にフィーストは開かれるのですか。」この言葉を聞いて何人かが準備に走り、間もなく食事がふるまわれました。背の低い食卓がテントの中央に置かれ、バハオラとその家族が食卓を囲んで座りました。食卓に余裕があったので、バハオラは何名かの信者を名指しして食卓につくよう命じられました。私の名前も呼ばれたので私はテントに入り、バハオラの御前で食卓につきました。

（タヘル・マルミリの回想録より）

カルメル山にある万国正義院の建物

<u>バハイ世界本部はなぜカルメル山にあるのか：</u>

バハオラはアッカで合計 24 年間すごされました。バハオラの霊廟もアッカの近くのバージにあります。ところが、バハイの「世界本部」はハイファ湾をへだてたカルメル山にあります。バブの霊廟も、万国正義院の建物も、国際布教センターの本部も、国際資料館もすべてカルメル山にあります。それはなぜなのでしょうか。その理由は、バハオラの著された「カルメルの書簡」にあります。バハオラは４回カルメル山を訪問されましたが、その最後の訪問の時(1891 年夏)、バハオラは「カルメルの書簡」を著わされました。その

中でバハオラはカルメル山に呼びかけ、「神は間もなく汝の上に神の箱船を浮かべる」と約束されています。カルメル山にバハイ世界本部を置く理由の原点はすべてこの言葉にあります。

カルメル山に関する予言：
旧約聖書にはカルメル山に関する予言が多く含まれています。イザヤ書に収められている２つの予言は特に興味深いものです。

イザヤ書３５章：　これはカルメル山とその南の海岸沿いに広がるシャロンの平原に関する予言です。予言によると、荒涼としていたその地はやがて緑に覆われ、「主の栄光」との対面を果たすとあります。そして、この地には「聖なる道」が作られ、人々はこの道を登るとあります。いうまでもなく、バハオラのお名前の意味は 「神の栄光」です。

荒れ野とかわいた地とは楽しみ、砂漠は喜びて花咲き、
サフランのようにさかんに花咲、かつ喜び楽しみ、かつ歌う。
これにレバノンの栄光が与えられ、カルメルおよびシャロンの麗しさが与えられる。
彼らは主の栄光を見、我々の神の美を見る。
そこに大路が敷かれる。その道は聖なる道と呼ばれ、
主ご自身がその民に先立って歩まれ、
愚か者はそこに迷い入ることはない。
そこには獅子はおらず、飢えた獣が登って来て襲いかかることもない。
解放された人々がそこを歩み、主にあがなわれた人々は帰って来る。

イザヤ書２章：　これは「神の山」に関する素晴らしい予言です。カルメル山の名前は登場しませんが、人々が平和と全人類の和合を求めて神の山を登る光景が描写されています。

終わりの日に、
主の神殿の山は、山々の頭(かしら)としてかたく立ち、
どの峰よりも高くそびえる。
国々はこぞって大河のようにそこに向かい、多くの民は来て言う。
「主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。主はわたしたちに道を示される。
わたしたちはその道を歩もう」と。

主の教えはシオンから、御言葉はエルサレムから出る。
主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。
彼らは剣を打ち直して鋤(すき)とし、槍を打ち直して鎌(かま)とする。
国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。
ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。

カルメルの書簡：
1891 年の夏に著わされたバハオラの「カルメルの書簡」は、いわゆる「対話方式」の書簡です。つまり、「天上の軍勢」とカルメル山とバハオラの三者の対話を記録した形とな

っています。まず、天上の軍勢がカルメル山に呼びかけ、カルメル山がその呼びかけに答えます。最後にバハオラご自身がカルメル山に語りかける内容となっています。

この日に栄光あれ。
慈悲の芳香が全創造物に漂いしこの日に、
過去のどの時代もどの世紀も及ばないほど祝福されしこの日に、
日の老いたる者の御顔がその聖なる座に向けられしこの日に。

まさにそのとき、森羅万象の声が鳴り響き、その彼方からは天上の軍勢の声が重なり合って高らかに聞こえてきた。

「急げ、おお、カルメルよ。見よ、名称の王国の支配者にして天界の形成者に在す神の御顔の光は汝の上に掲げられたのである」。

歓喜にわれを忘れ、カルメルは声たからかに叫んだ。

「あなたは私を見つめ、あなたの恩恵を私に与え、あなたの歩みを私に向け給いました。それゆえ、私の命をあなたに捧げることを許し給え。おお、永遠の生命の源なる御方よ。あなたとの別離により私はもはや焼滅し、あなたの御前を遠く離れることにより私の魂は焼き尽くされました。あなたは私にあなたの呼び声を聞かせ、あなたの足跡により私に栄誉を与え給いました。私の魂はあなたの御代より漂う生命を与える芳香と、あなたの民にとどろく覚醒のラッパと定められたあなたのペンの鋭く響きわたる声により呼び覚まされました。それゆえ、私はあなたにすべての賛美を捧げます。そしてあなたの抵抗し難い信教の啓示の時刻が満ちたとき、あなたはあなたの精神の息吹をそのペンに吹き込まれました。すると、見よ、全創造物は根底より揺り動かされ、森羅万象の所有者なる御方の宝庫に秘められていた神秘が人類に明かされたのです」。

カルメルの声がこの最も崇高なる場所に届くや否や、われはこう答えた。

「おお、カルメルよ。汝の主に感謝せよ。われよりの別離の炎は汝を焼滅しつつあった。まさにそのとき、わが出現の大海は汝の顔前に押し寄せ、汝と全創造物の目をなぐさめ、見えるものと見えざるもののすべてを喜びに満たした。
この日、神は汝の上にその王座を確立し、
汝を御しるしの黎明の場となし、
啓示の証拠の曙となしたのである。
それゆえ、大いに喜ぶがよい。
汝の周囲を巡り、
汝の栄光の出現を宣言し、
汝の上に注がれた主なる神の恩恵について語るものは幸いなり。

主は慈悲の証として汝の悲しみを喜びに変え、苦悩を転じて至上の喜びとなしたのである。それゆえ、栄光に満ち給う主の御名において不滅の聖杯を握りしめ、主に感謝を捧げよ。

主はこの地をこよなく愛す。
彼の王座の据えられたこの地を、
彼の足跡に踏みならされたこの地を、
彼の来訪により栄誉を与えられたこの地を、
彼の呼び声のとどろいたこの地を、
彼の流した涙に潤されたこの地を。

「おお、カルメルよ。シオンに叫び、この喜ばしき吉報を告げよ。人類の目より隠されていた者はいまや出現した。すべてを征服する彼の主権は現わされ、すべてをつつみこむ彼の光輝は明示された。ためらうことも、立ち止まることもないよう注意せよ。急ぎ行き、天より下りきた神の都の周囲を巡行せよ。これこそは神の寵愛を受けた人々、心清らかなる人々、そして最も高遠なる天使の集合が崇敬の念をもって巡る天来のカーバである。この啓示の吉報を地上のあらゆる所に知らしめ、すべての都市にあまねく伝えることをわれは切望する。これこそはシナイの心を魅了した啓示であり、燃える藪はこの啓示の名においてつぎのように叫んでいる。『天と地の王国は、主の中の主なる神に属す』。まことにこの日こそは、地と海とがこの吉報に歓喜する日である。この日の啓示に備えて、神は人間の限られた理解力や有限なる心の視界をはるかに越える恵沢をもって多くのものを蓄え置かれてきたのである。神は間もなく汝の上に神の箱船を浮かべ、名称の書に記されたバハの人々を現わすであろう」。

全人類の主は神聖なり。主の名が述べられるや否や、地上のすべての原子は震動し、荘厳なる舌は主の知識につつまれ、主の威力の宝庫に隠されていたものを明かしたのである。まことに、彼こそは御力に満ち給う全能者に在し、最も高遠なる御方にましまし、その御名の威力により天と地にあるすべてのものを支配し給う。

バハオラが晩年を過ごされたバージの邸宅

バハオラが晩年を過ごされたバージの邸宅に係わるエピソードを２つ紹介します。

<u>エピソード（１）：夜中の巡行礼拝　　（タヘル・マルミリの回想録より）</u>
バハオラは 1879 年 9 月にバージの邸宅に移られましたがこのエピソードは、バハオラがバージに入居された最初の夜の出来事を物語っています。ここに登場するナビルとはバハイの歴史書「夜明けを告げる人々」の筆者です。また、「巡行礼拝」とは聖なる地点の周囲を巡り歩きながら礼拝することを意味しますが、この礼拝の形はバハイをはじめ様々の宗教に見られます。今では大勢のバハイが参加するバージでの「巡行礼拝」が特別な記念日などに行われます。例えば、1992 年 5 月にはバハオラの昇天 100 年を記念して世界中から集まった 3000 人の信者がバハオラの昇天の時刻に合わせてバージで夜中の「巡行礼拝」を行いました。

「それは丁度バハオラがバージに移られる最初の夜のことでした。私はナビルと共に、私たちの泊まっていた宿の二階の窓の前に釘付けになっていたのです。その窓はバージに向かう時にバハオラが必ず通られる道を見下ろす位置にあったのです。バハオラのお姿が見られるのを今か今かと待っていました。ようやくお姿が見えたのは日没から二時間ほど経過したころでした。バハオラはいつもご愛用される真っ白なロバに乗られて私たちの宿の前を通過されました。何歩か遅れてミガザ・アガ・ジャンが唯一の従者としてやはりロバに乗ってバハオラに続いていました。

お姿が見えなくなるとナビルは私にこう言いました。「我々もバージまで徒歩でおともして、巡行礼拝を行なおうではないか」。私としては願ってもないことでした。二人で宿

の階段を駆け降りて、先を行かれるバハオラとは常に 50 歩ほどの距離を置きながら早足でバージまで行きました。

その夜、バージの邸宅には大きなランプが灯っていて、遠くからもよく見えました。三機のほやを持つこのランプには見覚えがあったのです。それはわざわざインドのボンベイからアフナン家の人々[バブの親族]がバハオラに贈ったものだったのですが、イランから聖地までの間それを運んだのは私ともう一人の巡礼者の二人でした。

バージの邸宅に到着されるとバハオラはロバを降りて建物の中に入って行かれました。お姿が見えなくなると遠巻きにしていた私とナビルは巡行礼拝を行うために建物に近づきました。何か様子がおかしいと感じたのはその時です。人の気配がするのです。誰もいないはずのところから人の話し声が聞こえるのです。耳を澄ますと大勢の人の吐息が聞こえて来るのです。建物にもう少し接近すると、何と驚いたことに邸宅の壁ぞいの小道には足の踏み場もないほどに大勢の人が立っていたのです。彼らは隊をなし、バハオラのいま入られた建物をあたかも四方から守るが如く整列していました。

私たち二人はただ呆然と彼らの姿を眺めていました。しかし、彼らは一体だれなのか。アッカの他の信者たちでないことだけははっきりしていました。私たちはとっさの思いつきで何の許可もなくアッカからバハオラのあとを追って来ていたのですし、アッカからは私たち以外には誰も同伴者はいませんでした。いずれにしても、壁ぞいの小道を巡行するのは不可能だったので、しかたなく 30 歩ほど後退したところで巡行礼拝を行うことにしました。そこにはぬかるんだ麦畑などがあって、泥の中の巡行礼拝となってしまいました。邸宅の周囲を歩いている間も、少し離れたところに立つあの正体不明の大群の存在を強く感じました。やがて一周を終えると、私たちは最後にバージの正面玄関の前に正座し、平身低頭して礼拝を終了しました。それから帰路についたのですが、途中で土砂降りとなり、やっとアッカの城門に到着すると門番たちが門を閉ざす寸前でした。アッカの城門は日没から四時間してから閉ざすのが普通でした。

宿に戻るとナビルはこう言いました。「こんな素晴らしい夜を寝て過ごすのはもったいない。朝まで起きていようではないか。私は詩を書くから、お前は紅茶を入れてくれ」。世が明けるまで私は何回も紅茶を入れましたがナビルは休まず詩を書き続けていました。彼は非凡な才能を持つ詩人で、何のためらいもなく次から次へと即興で詩を書いて行きました。朝になると、一枚の大きな紙の表と裏にびっしりと詩が綴られていました。これらの詩に砂糖のかたまりを二つ付けてバハオラに贈りました。[砂糖のかたまりは当時よく用いられた贈り物]

バハオラの生涯の主な出来事をナビルは詩にしていたのです。テヘランでの投獄に始まり、バグダッドへの追放に続き、そこからはイスタンブール、エデルネ、そして最後にはアッカへの追放とその間のバハオラの苦しみが見事な詩にまとめ上げられていました。

最後の方でナビルはその夜の出来事を書き記していました。私とナビルがバハオラの後についてバージまで行ったこと、そこで巡行礼拝を行ったこと、その時にバージの邸宅の周囲に隊をなして立っていた神の預言者たち、使者たち、そして天上の軍勢の姿を私たちが目撃したことなどが描写されていました。また、二人で徹夜して、詩を書き、紅茶を飲んだことも詳しく書かれていました。

その詩をバハオラに送ったのですが、後日、私とナビルに宛てた返信が届きました。その書簡を通じてバハオラはあの夜の私たちの巡礼と礼拝を承認された上で、ナビルには「うぐいす」と言う称号を付与され、私は「至福に酔う者」の意味の称号をいただきました」。

エピソード（２）：　エドワード・ブラウン博士の証言

英国のケンブリッジ大学の東洋学者であったエドワード・ブラウン博士はバハオラに会見した数少ない西洋人です。ブラウン博士は 1890 年の春にアッカを訪れ、約一週間バージに滞在しました。その間、４回に渡ってバハオラと会見しました。会見の様子を描写したブラウン博士の言葉を紹介します。

「私の案内者は、私が靴を脱ぐ間しばらく立ち停まっていた。それから手をすばやく動かしてカーテンを引き、私が通ってしまうとそのカーテンを元通りにした。すると私は広い部屋に入っていた。部屋の上手には低い長椅子があり、扉と反対側には二、三脚の椅子が置かれていた。私はどこへ連れて行かれるのか、誰に会えるのかと、かすかに感づいていた。やがて一分か二分たった頃、ぞっとするような気がしてこの部屋に誰かがいることにはっきりと気付いた。長椅子の端が壁に接している隅のところに不思議な、そして神々しい姿の人物がタージュと呼ばれる種類の頭巾をかぶって腰かけていた。その頭巾の裾のまわりには白い小さなターバンがまとわれていた。私が熟視した彼の顔は描写する事はできないが決して忘れ得ない顔であった。輝くその目は何人の心をも読むが如くであった。力と権威とがその大きな額に備わっていた。額や頬には深いしわがあるが、黒い頭髪や、ほとんど胸まで房々とおおっている髭は、歳をあざむくばかりであった。私はその人の前に身をかがめた時、それが誰の前であるかをたずねる必要はなかった。その人こそ王たちもうらやみ、帝たちもいたずらに嘆息する程の愛と熱誠の的である人であった。

優しいが威厳のある声が私にすわるように命じた。それから、次のように言われた。

『あなたの到来を神に感謝する。あなたは囚人にして流刑者である者に会いに来られた。我はただ世界の利益と、国々の幸福とを願うばかりである。しかし、人々は我を暴動の煽動者とみなし、その罪を禁固追放に値するものとした。

すべての国が信仰において一体となり、
　すべての人々が同胞として一体となること、
　　人々の間に親愛と和合の絆が強化されること、
　　種々の宗教の多様性が消滅し、
　　人類の差別がなくなること、
　　これらのことのどこに害があると言うのか。

しかし、それは必ず実現されよう。これらの無益な闘争や破壊的な戦争はなくなり、やがて最大の平和が必ずや来るであろう。あなたもまたヨーロッパでこれを必要としているはずである。これはキリストが予言したことにほかならない。しかし、ヨーロッパの王や支配者たちは人類の幸福のためよりも、人類の破壊のためにより自由に財宝を費やしつつあるのを見るではないか。これらの闘争や流血や不和はやめ

られねばならない。そして、全人類は一家族、一親族の如くにならねばならない。誇りは自国を愛する者にあるのではなく、人類同胞を愛する者にあるのである』。

私はバハオラから、その時きいたことは他にも色々あるが、以上が私の記憶する限り、その時の言葉である。これらの言葉を読む人々は熟慮していただきたい。果たしてこのような教義が束縛や死に値するかどうか、また、世界はこれらの言葉の普及によって利益を得るか、それとも損失を招くか、と言うことを」。

（「バハオラと新時代」より）